小山工業高等専門学校
研究紀要第 54 号(2021)

社会科の結節点

― 1 年次「地理・歴史」の授業実践より ―

池田　和子[*1]

Some Nodes on Social Studies

― Suggestions inspired by “Geography and History ” in the first year of National Institute of Technology, Oyama College ―

Kazuko IKEDA

This paper aims to discuss two suggestions based on experiences through teaching a class named “Geography and History” in 2019. One is the theories of two inventions, “the Islamic world” and “tradition”. The other is two cases of environmental determination by a 14th century Muslim historian and a 20th century Japanese philosopher. Though the first-year students in our college need basic knowledge of social studies primarily, these theories make us perceive relations between geography and history.

KEYWORDS : Geography, History, Social Studies Education

1. はじめに

本稿は，2019 年度実施の 1 年次「地理・歴史」の授業実践から得られた，地理分野と歴史分野との接点・交点や，両者の視点の違いについて考察するものである。本稿を通じて，指導要領において「社会的な見方・考え方」[1]として統合される前提として，それぞれの分野がどのような共通項や差異を持っているのか，1 つの事例を提供することを目的としている。

科目の概要については，1 年次「地理・歴史」は，2019 年度が最初の開講年度であった。地理と歴史を 1 つの科目として開講すると打診を受けたのは，新年度まで 3 か月を切った 2019 年に入ってからだった。そうした事情もあって，2019 年度の「地理・歴史」は1学年全員を集め1コマで実施し，通年の授業のうち約 3 分の 2 を地理分野として筆者が担当し，約 3 分の 1 を歴史学の長峰博之先生が担当された。開講が決定してから実施終了までの間，我々は実施内容に関することをはじめ，実施後の学生の反応など，情報共有を行った。その過程で，筆者はユーラシア史を専門とする長峰先生より，歴史学から地域をみる視点について参考図書などの示唆をいただいた。授業で取り扱う事例地域の選定という形で，地理分野と歴史分野の

*1 一般科非常勤講師(Part-time Lecturer in Department of General Education)，E-mail: i_kazuko@fd6.so-net.ne.jp

内容に連携を持たせることができれば，相互について学生の理解をより効果的なものにできると考えたためである。本稿では，いただいた示唆のなかで特に 2 つの点について，考察を進めていく。

筆者はこの授業実践を通じて，地理学と歴史学を 1 科目として実施することの意義と向き合うことになった。筆者の素朴な気づきを，例えば社会科科目における地理と歴史それぞれの役割を論じるレベルにまで高めていくことは，筆者の技量を大きく超える。ただ，そもそも社会科として一括される隣接分野と関わる経験は筆者にとって貴重に感じられ，この授業実践は，地理学とは何かといった根本的な問いと向き合う機会となった。本稿は，地理分野と歴史分野の交点に立つこととなった筆者のフィールドワークの記録といってよいだろう。

2．「〇〇の創造」とそれらの焦点

羽田正『イスラーム世界の創造』[2]は，2005 年に東京大学出版会から出版されている。本書は，所与のものとされている「イスラーム世界」という用語を問い直すものである。本書は，参考図書として紹介された数点のうち 1 つである。

本書によると，「イスラーム世界」は複数の意味で使用されている。そのうち，ムスリムが多く，宗教としてのイスラームの影響力が大きい地域を「イスラーム世界」とする世界認識は，「19 世紀になって世俗化が進行する近代西ヨーロッパで生まれた」という。筆者なりにまとめると，ヨーロッパ列強の知識人は自らを近代化した「ヨーロッパ」と位置づけ，これに対置されるネガティブなものとして「イスラーム世界」を創出した。これと並行して「イスラーム世界」の中からも，ムスリムの連帯が主張され，その運動のめざす世の中もまた「イスラーム世界」と称された。この両者が「イスラーム世界」の起源となる。日本の学校教育においては，他国では珍しい「世界史」が戦前から置かれ，1956 年から「イスラーム世界」の語が教科書で使用されている。その背景について本書の著者は，戦前の「回教圏」との関わりを指摘する。ムスリム自身によるポジティブな「イスラーム世界」概念が先に日本人研究者に取り入れられ，1930 年代に「回教圏」概念のもとで蓄積された研究が現在に受け継がれているという。つまり，ヨーロッパにおける「イスラーム世界」と，日本でのそれは完全一致するものではない。筆者の理解では，「イスラーム世界」の空間的な研究範囲は同じであるが，対象地域へのまなざしが異なっている。いずれにしても著者は，「イスラーム世界」は「19 世紀的世界認識に基づく地域設定」であり，「現代世界の成り立ちを理解するための世界史にはもはや不要」だとまでいう。

本書の書き出しは，「「イスラーム世界」とは何のことで，一体どこのことなのだろう」とある。本書に世界史教科書の分析があることから，筆者の手許に残っていた 1991 年発行の山川出版社『再訂版詳説世界史』[3]（以下「1991 年版」とする）の目次を確認した。第 5 章から第 7 章のタイトルが「〇〇世界の形成と発展」で統一され，順に東アジア世界，イスラム（ママ）世界，ヨーロッパ世界と設定されている。それ以降の章タイトルにおける地域呼称は，単に「近代ヨーロッパ」や「アジア諸国」である。1991 年版では紀元後 4 世紀ごろから 15 世紀ごろの中世で，章タイトルに「世界」が用いられている。ただし，第 11 章 3 節に「トルコ世界とイラン世界」があり，「世界」の使用には地理的な偏りが伺える。2010 年以降の教科書では産業革命を区切りとし，かえって「世界」の使用範囲が拡大している。近世でも「世界」を使用しているものや，さらに遡ってオリエントの時代から目次に採用する教科書もみられる。数点を確認した範囲で単純に比較はできないが，現在は 15 世紀後半から推し進められる「世界の一体化」までは，各地域に「世界」があったと印象づけている。そのため「イスラーム世界」が現在の地理教科書側の地域区分と対応していないことが，より気づかれにくくなっている。

筆者はまず，本書のタイトルに強くひきつけられた。「創られた伝統」という概念を想起させたからである。

『創られた伝統』[4]はエリック・ホブズボウムとテレンス・レンジャーを中心に執筆され，そこで提示された概念が「創られた伝統」である。日本では 1992 年に文化人類学の研究者を中心に翻訳し出版された。本書は，私たちが伝統的であると認識しているものの一定量が，実は「形式的に制度化され」たり，短期間で確立されたりしたもので，その過程を「伝統の創出」としている。この過程によって，ある集団の帰属意識を象徴したり，ある集団の権威や地位を確かなものとしたり，対

象の価値や意味を広く社会に説明したりするという。この概念は，特に地理学では，地域文化が観光のためのアトラクションや展示品として整えられる状況を分析する重要な視点の 1 つとなってきた。地域文化の真正性との関わりのなかで，伝統が創造される状況の背景や，創造の過程を通じ関係主体の思いを読み解こうとする。

「創られた伝統」は大学で学ぶ地理学の内容であるが，筆者は本学で観光に関する内容を扱う際には触れている。都市計画や伝統的な街並み保存に関心を持つ学生がいることが推察され，また比較的身近な経験と照らし合わせて理解が可能な概念であると考えている。

以上の 2 つの「創造」は，歴史分野における「イスラーム世界」という地域区分への再考を促す問いと，地理分野における「伝統」という時間に関わる語への再考を促す問いと対置することができる。お互いに自らの領域ではない方が，所与のものとなりがちだということができる。

地理学において，研究対象地域の設定があいまいであってはならない。例えば「東京」を対象とした 1 つの研究で，「東京」が「東京都」，「東京都区部」，「首都圏」などのうち，どこを示すかは一義的に定まっている必要がある。より厳密に，地図によって境界を示すことも少なからずある。いっぽうで，研究対象となる「伝統」が真に伝統的であるかを検証することはまずない。筆者自身の調査研究においては，伝統の真偽ではなく調査対象者である関係主体がそれをどのように認識しているかを重視している。翻って，歴史家にとって地域区分が必要となる状況は，地域史など，設定された所与の地域の歴史を記述するときや，世界史教科書のように構成上カテゴリ化するときだと考えられる。

世界史と地理（のうち地誌）のいずれの教科書も，予め地域区分を設定して記述するという流れは同じである。高校地誌での地域区分は 6 つの州を基本としつつ，情報量の違いなどで特定の国を節としているものがみられる。

なお，『イスラーム世界の創造』での「イスラーム世界」は地理的概念とみなされている。「イスラーム世界」は「ヨーロッパ」の対概念で，「地理的に明確に指し示すことはできないが，現実に地球上に存在する空間」という。しかし，筆者にはこれが地理的なものというよりは，一種の世界観のように感じられた。さらに対概念としての「ヨーロッパ」も定義されているわけではなく，実はあいまいである。想像するに「ヨーロッパ」とは，世界の主流である，キリスト教と西洋科学を基礎とした価値体系を意味している。「イスラーム世界」は，それとは異なるオルタナティブな価値体系の 1 つといえるが，それだけではないのだろう。完全ではないにしても地理情報を持ち，自然環境とのつながりが感じられ，ここに関わる人々にとって意味があり，共有できる何かがあると考えられる。このような定義は，ある概念を想起させる。すなわち，静態的でなく，閉じた境界も必ずしも必要なく，その世界へのアイデンティティも単一でなく，しかし唯一無二であるという，マッシーの「場所」概念 [5]がしっくりくるように思えるのである。

3．風土の類型

イブン・ハルドゥーン『歴史序説』は，『イスラーム世界の創造』で言及されていた書物の 1 つである。著者は 14 世紀の歴史家で，本書は世界史教科書では『世界史序説』の名で知られる。教科書では，著者はこの書物で王朝の興亡に規則性のあることを指摘したと記述される。『歴史序説』は，岩波文庫（青 481）で全 4 冊あるが，筆者が関心を持ったのは第 1 冊目である [6]。なお，岩波文庫全 4 冊に収められているのは，書物全体の序論と第一部のみであるという。

第 1 冊目には，本題に入るための前提として，それまでの歴史書の課題などが指摘され，「文明の本質的性格」に関するいくつかの説明がなされる。そのなかで，地球全体の気候に関する記述があり，北半球を 7 つに分けた気候帯が示される。この気候帯の考え方は，12 世紀の地理学者イドリーシーに依拠したものである。『イスラーム世界の創造』によれば，気候帯の基本概念はイドリーシー以前からあり，さらにその前提となる世界の輪郭は，古代ギリシアの天文学者プトレマイオスのそれを継承しているという。ハルドゥーンの独自性は，気候を出発点に人々の地域差を説明しようとした点にある。外見だけでなく性格の違いを「血統」に求めていた当時の考え方を批判し，気候が直接的・間接的に人々の行動様式に違いをもたらすと主張した。具体的には，人々の皮膚や性格といった身体面の特徴だけでなく，衣食住や宗教を含む。

中央アジアから北アフリカにかけての中緯度付近では，人々は温和で，学問や技術，政治制度が整っているという。そのうえで，都市と「田舎や砂漠」との対比がなされる。「田舎や砂漠」は，地方といってもよさそうである。ただしその自然環境は，砂漠やステップなどの草原をさす。著者は，田舎や砂漠の人は善良かつ勇敢で質素な生活を営み，一方で都市の人は贅沢を競い，砂漠を自分たちだけで旅することもできないと指摘する。このような性質は生得的なものではなく，環境や習慣によって形成され，また変化するものであるという。

このように，世界を気候や自然環境に基づいて大まかに類型化し，人々の行動様式もそこにあてはめる考え方，何よりその類型の 1 つに砂漠が含まれることが，和辻哲郎の『風土』を想起させた。

和辻哲郎『風土』の初版は 1935 年で，本稿で使用するのは 1979 年の岩波文庫（青 144-2）である [7]。『風土』における類型はモンスーン，沙（ママ）漠，牧場の 3 つである。著者は留学中の見聞から風土の着想を得ており [8]，経験をもとに記述している。モンスーンでは，旺盛な自然の力の前に人が「受容的・忍従的」な性質となり，沙漠の乾燥した荒々しさは，これと反対に人に「対抗的・戦闘的」な社会関係を形成させる。牧場とは牧草地を指し，自然が人に従順であることを意味している。

実は，高校地理で和辻哲郎を学ぶ機会はない。和辻哲郎は地理ではなく高校倫理の学習範囲で，『風土』についても日本人のメンタリティと自然環境との関係を説明したものとして記述される [9]。なぜ高校地理では『風土』について触れないのか。1 つには，現行の高校地理に地理思想を組み込むことが難しいことが考えられる。高校地理のうち系統地理学の学習内容は，大学入試の段階では統計や主題図の読みとりなど，資料問題に対応できることが求められる。地理と関わりのある思想や社会理論は，理解度の測り方が他の系統地理学とは異なってくると考えられ，教えにくく理解しにくいだろう。もう 1 つ考えられることは，戦後の地理学が行った，和辻哲郎の風土論に対する環境決定論的だとの批判 [10] である。戦後の地理学は地政学が時局に関わった負い目から，政治的な関わりを避けるようになった [11]。人の外見や性格の要因を自然的諸条件に求める環境決定論は，人種間や民族間の差別を正当化していると捉えられた。

高校地理では『風土』を扱う機会がなく，またハルドゥーンの気候と人間への視点はあくまで前提にすぎない。筆者はハルドゥーンの記述に，遠い旅先で知人に遭遇したような感覚をおぼえた。筆者は，『風土』の類型に砂漠が含まれることには疑問を持っていたが，その要因を調べたことはなかった。ハルドゥーンとの “遭遇” を機に『風土』が書かれた背景を知り，その 3 類型も経験に基づくものであったことを理解した。2 つの書物は書かれた時代も，著者の地理的背景も，著述の背景やその後の理論展開といった文脈も異なる。しかしいずれも，人々の行動様式に地域差がみられることを観察から感じ取り，かつその背景に自然環境があることを指摘している。それぞれの著者が時代と地域と学問分野を超えて，同様の指摘をしているという事実がある。

風土は，社会科の分野がみな絡み合う，結び目に位置する概念といえる。地上では自然環境と人々の活動や思考との相互作用があり，その結果として交通網や制度などが整備され，それらは社会環境と呼ばれる。自然環境と社会環境に加え，時間的継続が物事を変化させたり，後に生じる活動へ影響を与えたりする。人々は環境とだけでなく，人同士や世代の間で多方向の相互作用をし続けている。風土のような，授業の中で他分野との重なりがある，あるいはない部分について知っておくことは，各分野の文脈を理解し，自身の位置を相対化するツールになりうる。

4．おわりに

本稿は，「地理・歴史」を担当したことで得た筆者の経験から，2 つの気づきについて考察してきた。1 つは「〇〇の創造」をめぐる焦点の違い，もう 1 つは風土への指摘という分野と時代を超えて見出すことのできる共通点である。

以上のような興味深い交点は見いだせたものの，授業実践に向けた結論としては，本学 1 年次，すなわち高校 1 年生向けの授業として「地理・歴史」を実践するには，まずは基本的な知識の教授を優先すべきであると思われた。当然ながら，受講者は中学社会科までの知識が前提であるため，限られた時間数のなかで説明すべき内容は多い。加えて，関係する複数分野の内容を盛り込むことになる。実現のためには，相当の準備期間をとり

構成を練っていかなければならないだろう。1 年次の実施では，本稿のような概念ではなく，事例のレベルで交点となりうる話題が好ましいだろう。具体的には歴史的に重要な自然災害や地図の歴史，あるいは工業都市形成の史的説明といったものである。担当者間でのかなり細かな情報共有ができれば，相互に補足することや多面的な説明が可能になる。

「地理・歴史」は，既存の科目名を並べただけのように見えるが，中点で結んだことの意義を考え効果的な実践を追求しようとすれば，綿密な作りこみが必要になる。一方で，学問分野の異なる担当者と議論する機会は，担当者自身にとっては得るものが大きいと感じた。担当者が受けた刺激を授業に反映させることができ，受講生とも共有できる環境が整うのであれば，先駆的で独創的な授業が期待できる。

参考文献

1）文部科学省：【地理歴史編】高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説，pp.45-58(2018)
2）羽田正：『イスラーム世界の創造』，東京大学出版会，pp.316. (2005)
3）村川堅太郎ほか：『再訂版　詳説世界史』，山川出版社，pp.6-7(1991)
4) E. ホブズボウム, T.レンジャー編（前川啓治ほか訳）：『創られた伝統』，紀伊國屋書店，pp.488. (1983 :1992)
5）ドリーン・マッシー（加藤政洋訳）：権力の幾何学と進歩的な場所感覚，思想 933，pp.32-44(1993:2002)
6）イブン・ハルドゥーン（森本公誠訳）：『歴史序説（一）』岩波書店，pp.514. (2001)
7）和辻哲郎：『風土－人間学的考察－』岩波書店，pp.299. (1979)
8）平野幸仁：和辻風土論の背景，横浜国立大学人文紀要第二類　語学・文学 33，pp.205-213(1986)
9）竹内整一ほか：『倫理』東京書籍，pp.69,108-109 (2013)
10）高野宏：和辻風土論の再検討―地理学の視点から―，岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要 30，pp.313-332(2007)
11）秋山道雄：伊藤達也:環境問題への地理学的アプローチ--研究と実践 (2004 年度〔人文地理学会〕大会特別研究発表--報告・討論の要旨および座長の所見), 人文地理 57, pp.94-99(2005)

[受理年月日 2021 年 9 月 17 日]